



森彬博（もり・あきひろ/1988-）は神奈川県生まれ、2013年に武蔵野美術大学を卒業、2015年、中野に GALLERY FREAKOUT を開設した。在学中の2011年から横浜と東京で、個展やグループ展を旺盛に行なっている。私は会場であうことはできなかったが、野心的な人物であろう。会場に貼られていたステートメントの一部を引用する。「Re:PLANET/物静かな私の部屋。/首をかき上げて観察してみる。/見慣れた日常に、違和感がひょっこり顔を出す。/取り留めもない一幕。/本展示は「日常に潜む違和感」をテーマとして、十数点の平面作品で構成されている。」作品を見ると、実に様々な技法で描かれている。同一人物が描いたと思えないほどに多彩である。ソリッドな抽象的な作品があったかと思うと、滲みを利用した風景画、レイ・メイドを引用する技法を用いているものもある。それが意図的に行なわれているのではないのが特徴的だ。森は日常をテーマにしているのではあるのだが、この日常自体がなかなか不可思議である。自らの部屋にある雑貨に目を向けているだけではあるまい。

森は、様々な世界を想起しながら制作に励んでいると思う。それは、これまでの美術史の定義では当て嵌まることのない想像力なのかも知れない。現代美術に歴史があってはならないのだが、積上げは存在する。森の作品は、そういった「積上げ」に当て嵌まることがない。それは、私が知らないだけのことであるともいうことが出来る。例えば私は森の作品から田中功起（1975-）の作品を想起する。田中の持つ迷宮性が、森の作品と交差するのだ。そして「積上げ」がない点でも共通する。しかし、森は田中の思想とは異なると考えているのかも知れない。それでも森と田中が圧倒的に異なるのは、田中がデザイナーのように条件を重視することに対して、森はあくまでも絵画に拘る所にある。森は今回の展覧会で絵画に限定したのかも知れないが、それでも森の描く絵画は面白い。田中のインスタレーションはつまらないのだ。森の作品の面白さについて、初めて見た私はまだまだ探求が必要である。それと共に、田中のような今日のアーティストの発想に対する調査も不可欠だ。やることが一杯ある。

